

路上のいのちに向き合う

—ひとさじの会の支縁を通じて—¹

吉水岳彦

私は、かつて山谷と呼ばれた、台東区清川の浄土宗光照院の住職です。路上生活者の支縁を行う「ひとさじの会」でも活動しています。

1. 浅草山谷に育って

私は山谷に生まれて山谷で育ったので、子ども時代には路上のおじさんたちが身近にいました。学校から帰ってきて玄関を開けようとしたら、中から見知らぬ男がとび出してきたことがあります。寺の供え物を小脇にかかえ逃げていきました。冬の朝、登校班でアーケード街を歩いていると、路上で寝ている人がいて、救急車で運ばれていったのを見たこともあります。小学校の校庭で遊んでいると、隣の公園側からじっと見ているおじさんが大勢いて、「あっちいけよ」と思ったことがあります。

先生に聞くと、「あいつらは怠けてきたからあんな風になった。あんな風になんたくなければ、しっかり勉強しろ」と言われました。他の大人に聞くと「あんなに汚くて、あんなに臭くても、お風呂に入らないで平気で、何を考えているかわからない。決して近づいてはいけませんよ」と言われました。

寺に生まれ、人には平等に接しなければいけないと育ててもらいましたが、仏教を勉強しても路上生活者に対するイメージは変わりませんでした。

2. 生活困窮者の葬送 —NPOとのご縁—

佛教を勉強して、困った人の力になりたいと考え、電話相談のトレーニングを受けたり困った人についての勉強をしていましたが、2007年の暮れ、「NPOもやい」のメンバーから「生活困窮者のためのお墓がほしい」と相談されました。

自分の家も収入もなく、身なりや臭いことすら気にしない人が、本当にお墓